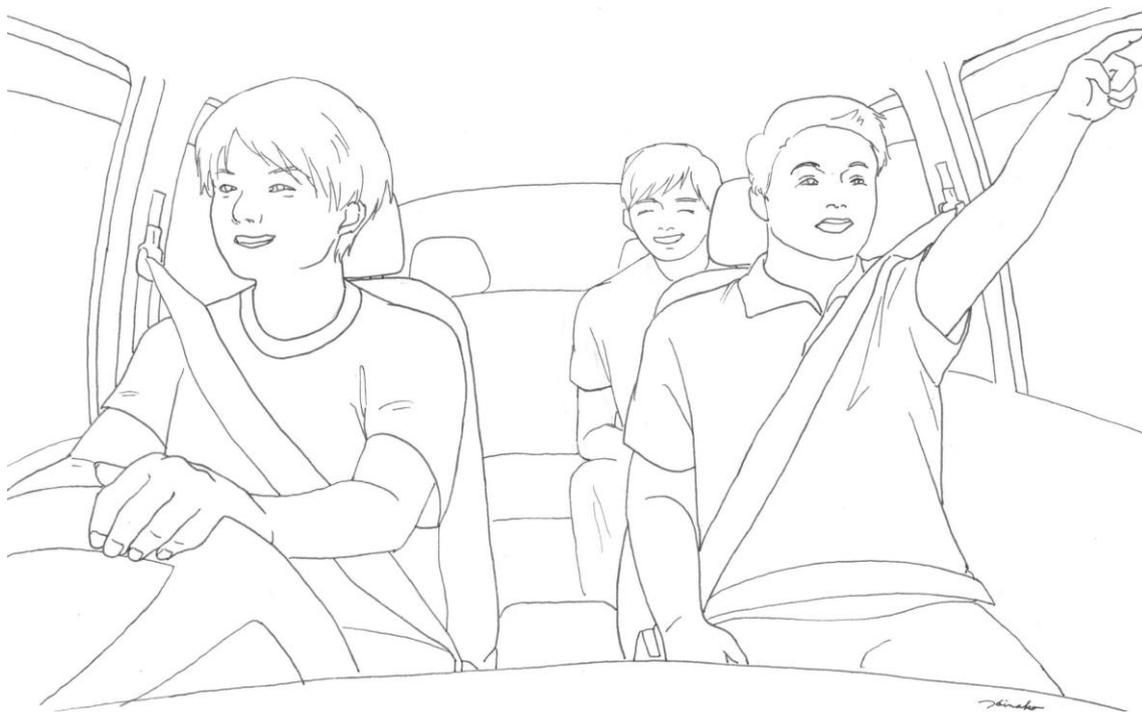


まなつ よる で き ごと 真夏の夜の出来事

すうじゅうねんまえ ほく だいがく ねんせい
あれは数十年前のこと。僕はまだ大学2年生だった。

だいがくせいかつ な あたら ともだち かね じかん げん
大学生活にも慣れて、新しい友達もできた。お金はなかったけど、時間と元
き じゅうぶん ともだち ひとり くるま も い さき き
気だけは十分にあった。友達の一人が車を持っていて、行き先も決めずによく
ドライブをした。例えば、ずっと海辺を走って、海から太陽が昇るのを見ながら
かん の かのえ ともだち
缶コーヒーを飲み、そして、ただ帰ってくる。そんなくだらないことも、友達と
たの
なら楽しめた。



(Drawn by Hinako FUJIMURA)

ひ よる
あの日の夜もそんなドライブだった。バイトが終わった午後8時頃、車を持つ
ている Y と、もう一人、その日にバイトがたまたま入ってなかった T と、3人で

ドライブは始まった。涼しい風の吹く、気持ちのいい夏の夜だった。隣の市までの30キロの道をただ走る。その間、僕たちはずっと話し続けた。誰かが冗談を言えば、他の二人が笑う。そんな楽しいドライブは隣の市をぐるっと回って、また元の道に戻るまで続いていた。来たときと同じ道に戻るのだが、帰りは、深夜になった。道路沿いの家々はすっかり静まりかえっている。明かりも消えている。僕たちも少しずつ口数が少なくなっていた。

隣の市から僕らの大学のある市へあと数キロで着くという辺りだった。そこは特に家が少なく、昼間でも静かなところだ。たまに建物は見えても、今は誰も住んでいなさそうに見えた。明かりが見えたと思ったら、ずいぶん昔に営業をやめてしまった喫茶店の前にある駐車場の自動販売機だけだった。昼間だったらそんなに気にならないけど、夜は一人では通りたくない道だ。

そんな道を抜けて、僕らの大学が見えてきた。Tが住んでいるアパートまであと少しというとき、突然Tが僕らに言った。

「ねえ、Y。時間あるだろ？このまま、まっすぐ運転し続けられない？」

僕とYはちょっと変に思ったけど、今から自分のアパートに戻っても、寝る以外にすることは無い。いいよ、と答えて、そのままドライブを続けた。

多分、10分ぐらいいたったころだ。Tが言った。

「もう大丈夫だと思う。さあ、帰ろう。」

Tの言葉で、Yは車をUターンさせて、僕らの住んでいるあたりを目指した。

Tは続けた。

「実はさ、帰り道の途中で、誰かがこの車の後ろにずっと見えていたんだよ。

僕さ、そういうこと、けっこう感じるタイプだから。」

気持ちのいい夏の夜だった。エアコンは使わず、窓を開けていた。それでも、なぜか車内の気温が少し下がった気がした。

Yにアパートの前まで送ってもらって、僕は自分の部屋に戻った。変な夜だったな、と思いながら、シャワーを浴びて、ベッドに横になる。

うとうとしかけたときに、電話がなった。僕の恋人からだった。恋人は隣の市に住んでいる。年上だった恋人は遅くまで仕事をしていて、電話をかけてくるのはだいたい深夜だった。

どんな一日だった？という恋人の質問に、僕はさっき起きた出来事を話した。

YとTと一緒にドライブした話、友達のTが何かを見た話。

恋人は、うんうん、とうなづきながら僕の話聞いていた。こういう話が好きなのだよ。

そして、「そういえば」と言って、恋人は自分の経験を語り出した。僕と出会うもっと前、恋人はよく僕の住んでいる市に来ていたそうだ。そして、ある日突然、肩や背中あたりに重く感じるようになった。そんな気分の悪い日

つづか続いたあと、かいしゃのきやくお客さんから、きゅうこえ急に声をかけられた。

「ねえ、きみうし君の後ろに、なに何かいるようだよ。」

そのきやくお客さんはなに何かを口でつづやきながら、こいびとせなか恋人の背中をなんかいたたどうさ何回か叩く動作をした。こいびとせなかきゆうかる恋人の背中は急に軽くなった。そして、こいびとき恋人にこう聞いた。

「ねえ、あなた、さいきんとなり最近隣の市に向かうみちとお道を通ったでしょう？そのみちとちゆう道の途中で、つづれたきつさてん喫茶店があったとおも思うけど、そこによ寄らなかった？」

こいびと恋人はしばらくかんがえて、そのきつさてんたてもものまえ自動販売機で、の飲み物を買って、かすこきゆうけい少し休憩したことをおもだ思い出した。それをつたこいびと恋人に、きやくお客さんはこうつげた。

「そこね、オーナーがじきつ自殺したところだよ。きき気をつけてね。」

そこまでき聞いて、ぼくでんわじゅわきと電話の受話器を取り落としそうになった。

いますうじゅうねんまえ今から数十年前、ぼくだいがくせい僕が大学生だったころの、まなつよるできごとある真夏の夜の出来事だ。

(1652字)

(2021.4 Written by Yuki MORI)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典: 「たどくのひろば」 (<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use

this work, please indicate the source as in the example above.